



ヒューマニティーズセンター
Humanities Center

東京大学ヒューマニティーズセンター
第62回オープンセミナー

コミュニケーション

による

「人間」

報告者

原 和之

東京大学大学院総合文化研究科 教授

ディスカッサント

松本 卓也

京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授

4/15

(金)

17:30-

19:30





ジャック・ラカンによる「人間」

報告者
原 和之

東京大学大学院
総合文化研究科 教授

ディスカッサント
松本 卓也

京都大学大学院
人間・環境学研究科 准教授

概要

精神分析家ジャック・ラカンは、第二次世界大戦後のフランスにおいて精神分析をその基礎から問い直すなかで、言語学、哲学、文学等さまざまな学問分野を参照しつつ新たな理論を提唱し、20世紀の人文思想に広い範囲で影響を与えました。精神分析が「こころ」を対象とし、これを「ことば」によって治療しようとする営みである限りにおいて、その問い直しのためには「こころ」と「ことば」のそれぞれを、あるいはそれら相互の関係を、従来とは異なった仕方
で捉えるということが必要となっていました。

二回を予定している講演のうち初回の今回は、彼による「こころ」の再規定が、どのように「人間」を捉える捉え方に変更を迫ったかという点を考えてみたいと思います。ラカンは必ずしも「人間」を主題的に論じる思想家ではありません。彼の議論の中では「人間」よりもむしろ「主体」が問題にされるわけですが、こうした議論の焦点の移動を引き起こすに至った彼の思想形成の過程を見てゆくと、そこにはある一定の仕方
で捉えられていた「人間」を根底から問い直すという契機があり、それが後期に現れる特異な「人間」概念—「人間 (l'homme)」ならぬ「ニンゲン (LOM)」—にまで反響しているように思われます。

本セミナーでは、このうちラカンの思想形成の初期から中期、「こころ」の科学の認識論的基礎づけから「他者の欲望の欲望」の問題に、さらには「欲望の弁証法」に至る展開についての報告を糸口としつつ、彼の思想を出発点とした「人間」の多様なあり方の理論的包摂の可能性について考察します。

**4/15
(金)**

**17:30-
19:30**

**要事前登録：4/13 (水) までに右QRコード先の
フォームにてお申し込み下さい。**

主催：東京大学ヒューマニティーズセンター
humanitiescenter.utokyo@gmail.com

画像：The Psychoanalytic Concept of Jouissance and the Kindling Hypothesis - Scientific Figure on ResearchGate. (https://www.researchgate.net/figure/The-graph-of-desire-complete-graph-J-Lacan-seminar-Desir-and-its-interpretation_fig3_319969031)

文章：Jacques Lacan, Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien, *Écrits*, Paris: Seuil, 1966

